

TIRI NEWS

Eye
Vol.58

平成電子株式会社

異業種の企業が開発に挑んだ デザイン性の高いカーボンステッキ

電子機器などの再生リペア事業を手がける平成電子株式会社は、先代社長の病をきっかけに「BONLAB(ボンラボ)カーボンステッキ」を開発。異業種への取り組みながら、そのコンセプトとデザイン性が高く評価されています。

出かけたくなる杖を作りたい 異業種の自社製品開発に挑戦

平成電子(株)は、1989年の創業以来、業務用キーボードやレーザープリンター用ユニットなどの再生リペア事業を手がけてきました。2013年に創業者である先代の社長が病に倒れますが、その後、懸命なりハビリを経て自力歩行ができるまでに回復。しかしある日、外出先で転倒、現在は車椅子で生活しています。

「家族から持っていくように勧められた杖を『年寄りに見られたくない』と断ったと聞きました。杖のイメージさえ良ければ防げた事故かもしれない。そこで社内ベンチャーを立ち上げ、杖の開発に着手しました」(若杉氏)

自社製品の開発、さらにBtoC向けの事業は経験がなく、まさにゼロからのスタート。ユーザーの声から杖が抱える課題を吸い上げ、デザイナーの廣田 尚子 氏にデザインを依頼し、50個以上の試作品を製作したといいます。パーツを実際に3Dプリンターで出力し、使用感を確かめながら完成

へ近づけていきました。

「一般的な杖はグリップを強く握ってしまい、手が疲れてしまいがち。そこで自転車のサドルをイメージし、上から手を乗せる構造とすることで、握力が弱い方でも扱えるよう仕上げました。中央部分がシェル状にえぐられているので、テーブルなどに立てかけても安定し、倒れにくいのも特徴の一つです」(若杉氏)

グリップを着せ替えられる工夫も ファッションで杖が選べる未来へ

約2年の月日を経て誕生した「BONLAB(ボンラボ)カーボンステッキ」は、見た目にもこだわりました。杖本体はカーボン素材で強度と細さを両立させ、グリップは別売りの着せ替えパーツでカラフルに彩れます。そのデザインは高く評価され、2019年度グッドデザイン賞を受賞しました。

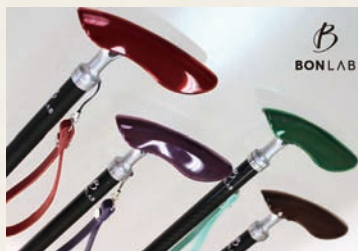
「再生リペア事業では、限界まで使用された製品を扱います。いわば『製品の死に際』に触れる仕事。傷や塗装の剥げなどが発生する場所を想像しやすいため、傷つきやすい

自転車のサドルをイメージしたグリップ部分。握るのではなく「上から手を乗せる」ことで身体の負担を軽減する。

グリップは『着せ替え』ができるようにしたい、という思いもありました」(若杉氏)

「BONLAB(ボンラボ)カーボンステッキ」はネットで購入が可能。子や孫からのプレゼントとして購入されるケースが多いほか、杖を必要とする若年層からも感謝の声が届いているといいます。今後は、折りたたみや長さ調節ができるタイプを開発する予定です。

「視力を補う道具であるメガネがファッションアイテムになったように、杖もファッションで選べるような未来が作れたらと思います。杖に対する心理的なハードルが下がれば、自分の足で外に出かけ、健康寿命も伸びるでしょう。軽やかに、元気に杖を使ってもらえたらいいですね」(若杉氏)



グリップの着せ替えのカラーバリエーションは4種類。一番人気は赤。



重さは195gと軽量。先端の石突部分はゴムの固さと形状を追求し、斜めに突いても滑りにくい作りとした。



平成電子株式会社
代表取締役
若杉 賢一 氏

「BONLAB(ボンラボ)カーボンステッキ」は「TASKものづくり大賞奨励賞」などを受賞し、先代の社長にも好評とのこと。「とても喜んで、周囲に自慢していました」